

「ケルン・南條本」再考

小 槻 晴 明

1. 梵文法華經校訂本成立の背景

英国・アイルランド王立アジア協会 (The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland) 所蔵梵文法華經写本は、原典テキスト引用の際に基準となる校訂本の底本として使用された紙写本である。この校訂本は、1908年から1912年にかけてサンクトペテルブルクで出版された¹⁾。これがいわゆる「ケルン・南條本」である。南條文雄の序によれば²⁾、1880年頃、ロンドンの王立アジア協会所蔵の写本³⁾を笠原研寿と書写し、作業が完了すると2人は直ちにケンブリッジに赴いて、Rをケンブリッジ大学の2写本によって校合した。その後、南條は一人でロンドンの大英博物館所蔵の写本B⁴⁾によってテキストを校合した。さらに1883年、ワッターズ (Watters) 将来本Wを借りて校合した。これら5本の写本以外に、フコー (Philippe Édouard Foucaux) の石版刷りのテキスト *Parabole de l'Enfant égaré*, Paris 1854 に収められたナーガリー文字の第4章のテキスト⁵⁾と、ワイリー (Alexander Wylie) 所有の木版テキストに収められていた第24章 (普門品) のテキストを参照している。これは、ワイリーが北京で入手したものである⁶⁾。南條は1884年帰国し、河口慧海が1903年に将来したT8を校合に用いた。1905年、南條は清書したテキストの全文をケルンに送り、ケルンがカシュガル本によって最終的な校合作業を行い、1908年の第1分冊の発刊に至るのである。実に、30年にわたる労作業であった。不撓不屈の精神で困難な作業をやり遂げた南條文雄に心からの賞賛と敬意を表明したい。

2. 校訂本の問題点について

Rが、15種類⁷⁾以上の紙写本のなかで、重要な位置を占める理由はこれで明らかになったと思う。この底本を可能な限り正確にローマ字化することによって、2つの問題点を解明するための基礎資料を提供することができる⁸⁾。すなわち、(A)脚注の読みが必ずしも正確ではなく、遺漏も見られること、(B)校合に使用した写本のなかで、ある写本の読みを校訂本の本文に採用する際の基準が曖昧で、一貫性がないという2点である。

(A)の問題は、結局、個々の写本読解の正確度という課題に還元される。ただ、(A)の問題は、その検証のために膨大な労力と時間が必要であり、しかも、その作業によって期待できる学問的成果は、(B)から期待できる学問的成果に比べて、それほど創造的ではないと筆者は考えている。一方、(B)の問題は、今後の梵文法華経文献学の分野で、豊かな収穫が期待できる分野である。(B)の問題とは、言うまでもなく、戸田宏文が全力を傾注し、考察した「ネパール系写本のグループ分け」の研究に帰着する⁹⁾。ここで、ケルンが校訂の最終段階でカシュガル写本の読みを本文に編入した問題があるが、この中央アジア系の写本は、ネパール系写本とは別の系統として、考察されるべきであると筆者は考える。ただし、本稿においては、校合に使用された写本のひとつとして、A, B, Ca, Cb, K, W, Pと共に考察の対象に含める¹⁰⁾。

3. 戸田宏文のいわゆる「R系」について

他の梵語仏典写本と比べて、梵文法華経の写本の数とはびぬけて多い。校訂本の準備段階で今日のように多数の写本の存在が確認されていたなら、南條もケルンも、異なる系統の写本群の存在に気づいて、それらを注意深く検証し整理した後に、校訂本を作成したにちがいない。当時と今日の時間のズレが、結果的に校訂本の本文と脚注の読み混乱をもたらしたと筆者は考えている。しかし、それが多くの学者の関心と呼んだことも事実である。特に、前述の(B)の問題は非常に重要であり、これが解明されれば、異なる系統の写本をつなぎ

合わせて編み上げた「ケルン・南條本」が内包する問題は一挙に解決する。そればかりか、「ケルン・南條本」を超える新たな校訂本作成への展望が大きく開ける。戸田宏文が、「ネパール系写本のグループ分け」への作業を最優先課題として取り組み、グループ別テキストの確定を企画したのは当然の推移であった¹¹⁾。

さて、「ケルン・南條本」の底本となったR写本は、T4, T5, T9にきわめて類似した写本である。戸田宏文は、これらの紙写本群を常づね「R系」と名づけ、写本読解の際の重要な道しるべの一つにしていた。A2, A3, T8, P3等の紙写本が、この「R系」に部分的によく一致する。「部分的に」という意味は、一致する箇所が何章にもまたがる場合も含めるが、その長さは、個々の写本によって異なる。「R系」は、紙写本間の系統を見極めるだけでなく、貝葉写本と「R系」以外の紙写本とを比較する際の重要な視点ともなる。「R系」に限らず、あるグループの代表的な写本を正確にローマ字化しておけば、それを道しるべとして、同系統の写本群を迷うことなく解読することができるし、それによって、同系統の写本群の同じ箇所をすべて読んだことにもなる。

しかし、いかなる写本であれ、それが最後まで一貫して、あるグループの読みを維持するものではないことも事実である。どこでその読みの一貫性が途切れるかは、個々の写本でバラツキがあり、それまで一貫していた読みから外れた写本が、他のどのグループの読みにも紛れ込んで行くか、他のグループのどの写本が別の写本グループの読みにも近づいていくか、また、それらがどこで本来の所属グループの読みに戻っていくかといった、ネパール系写本間の読みの絶え間ない変動を、常に正確に追尾し、それらが本来所属するグループを見極めなければ、かえって、大きな錯誤を犯すことになる。これは、一筋縄ではいかない、気紛れな写本の読みとのおっかけっこである。正確な読みにも裏打ちされ、ミクロ・マクロの視点から、この複雑さを追っていく必要がある。それでも、この気紛れのなかに一定の法則性のようなものが存在する。それを鋭敏に嗅ぎ分けるという職人技を体得したのが、30年以上、梵文法華経写本の解読に取り組んだ戸田宏文であった。いずれにしても、「R系」写本群の読みの結束は固い。¹²⁾

戸田宏文がこれらを「R系」と命名しただけの頼りがいのある、写本解読の有力な道しるべの一つである。この発見は、彼の独創であり、梵文法華經写本研究史上最大限に賞賛されるべき学問的成果の一つである。「異読を写本と共に無原則に羅列するが如きは、意味をなさない」¹³⁾ という彼の言葉は、彼が到達した極意を余すところなく表している。

4. 校訂本に見られる (A) と (B) に関する具体例

まず、(A) の問題点に関して、校訂本の 1、2 ページと、第 4 章の若干の脚注について、検証とその修正を試みたい。

Kn 1

(1) fn. 2) *śrī* added in W. は、*śrī* added in W. K. (=T8) となる。W は現在所在不明の紙写本であるが、Kn の脚注の指摘から、第一章から第三章 (Kn1-99) までは K にきわめて近い写本である可能性が高い。

(2) fn. 4) *lyam* の *m* は、明らかに K の誤写と見られるので、*lyam* K. only. となる。¹⁴⁾

(3) fn. 5) *ram* K. W. は、*ra* Ca. (=C4) *ram* K. W. left out in Cb. (=C5) となる。なお、Cb の Kn 1.1-2.8 は失われている。

(4) fn. 7) *jñānā* K. は、*jñānā* A. (=R) . K. *ājñā* Ca. B. O. となる。この脚注を (B) のグループ分けの視点から言えば、底本とした A の読みを捨てて、Ca, B, O. の読みを校底本の本文に採用した根拠に言及する必要がある。

(5) fn. 8) *jñābhijñātai* A. Ca. Cb. *jñātābhijñātai* B. O. *jñānābhijñānai* K. *jñānābhijñātai* W. は、*jñābhijñātai* A. *jñātābhijñātai* Ca. °tai O. *jñātābhijñātai* B. *jñānābhijñānair* K. *jñānābhijñātai* W. となる。ここでも、A の読みを捨てて、W の読みを校訂本の本文に採用した根拠が明らかにされるべきであろう。それだけに、読み的一致する可能性が高い W と K の、この箇所での不一致には、誤写、誤読、誤植の可能性が残る。しかし、W が発見されていない現状では、これ以上の検証は不可能である。また、*jñābhijñātai* A. Ca. Cb. の記述は重要である。Ca (=C4) と、欠落している Cb (=C5) の読みを A と同一視している。ところで、

C3 の読みは *jñātābhijñātaiḥ* である¹⁵⁾。Kn の Preliminary Notice の Ca, Cb がそれぞれ、Add. MS. 1682 (正しくは1683), 1683 (正しくは1684) の誤記 (あるいは誤植) となっている点を勘案すれば、この脚注の読みにも C3 の読みが紛れ込んだのではないかという憶測も全くの的外れでないかもしれない。南條は、校合に用いたケンブリッジ大学図書館の 2 本の写本は、ケルンが英訳の底本にしたものと同じ写本 (C3, C4) だと述べている¹⁶⁾。ただ、C3 は、Kn 254.2 以後の後半部分が失われているので、それ以後に C3 を参照することはありえない。この間の事情の解明は、今となってはひじょうに困難である。

Kn 2

(1) fn. 1) Left out in A. B. Cb. K. W. の Cb. は不要となる。前出 Kn 1 (3) fn. 5) を見よ。

(2) fn. 2) *kapphi and kaṃphi* O. *kaphi* the others. は、*kaṃphi* O.¹⁷⁾ *kaphi* A. K. *kaḥhi* B. *kaph (?) phi* Ca. となる。校訂本の読みにも O を採用したと思われる。

(3) fn. 3) *lle* A. *ne* Ca O. *ṇde* K. には、*ṇe* B. を追加する。

(4) fn. 4) *ku* K. は、*kku* Ca. O. *ku* A. B. K. となる。

(5) fn. 5) *mahā* left out in B. O. は、*mahā* left out in Ca. B. O. となる。

(6) fn. 7) *pūrṇena* A. K. *paṇa* B. は、*pūrṇena* A. K. *pūrṇo* Ca. *paurṇa* B. となる。本文の *pūrṇa* は O の読みを採用しているが、このことに言及されていない。

(7) fn. 9) *pati* A. K. *patīrgautamī* Cb. は、*pati* A. K. *patī* Ca. B. *patīrgautamī* Cb. *patībhikṣuṇī* O. となる。ここでは、Ca B の読みが本文に採用されている。W の読みは記されていない。

(8) fn. 10) *rbhi* in B. only は、*bhiḥ* Ca. *bhir* B. O. となる。A. K. Cb. は複合語になっている。

(9) fn. 11) はたんに、*ti* left out in K. としないで、*ekajātipratibaddhair yad uta°* left out in Ca. Cb. O. °*baddhair yyad uta°* A. °*baddhair yady* B. °*pra (ti) baddhair yad uta°* K. と注記すべきであった。

(10) fn. 12) *yāḥ dher** B. K. は、*yāḥ dher* Ca. B. *yāḥ dhe(r)* Cb. となる。

(11) fn. 13) *rtti* W. は、*rtti* W. *rtyai* A. K. *rtta* Cb. *rtika* O. となる。Ca B が本文とし

て採用されている。

(12) fn. 15) *srai* K. は、*srai* K. left out in Ca. Cb. となる。

Kn 102

(1) fn. 6) Sic P. *anuhiṇḍamānaḥ* O. *paryeṣamāṇo* the rest は、*paryyaṣṭhamāno* A. *paryattamāno* Ca. *paryeṣamāṇo* Cb. *paryaṭamānonn* B. *paryeṭamāno* K. となる。ここではフコーのテキストの読みを本文に採用し、Cbの読みを the rest としている。同じページの8行下のKn 102.14にも同じ語が見られる。その読みは次の通りである。*paryyeṣamāna* A. *paryeṣamāṇo* Ca. Cb. P. O. °*naḥ* B. ここでは、fn. 6) の *paryeṣamāṇo* Cb. と同じ読みを採用している。

(2) fn. 8) *bhūyo* Ca. Cb. K. *bhūyām* P. *bhaved** O. は、*bhaveyaṃ* A. Ca. *bhūyo* Cb. *bhūyaṃ* B. *bhūyām* K. P. *bhaved* O. となる。この章はKとPがよく一致する。

(3) fn. 9) *t** A. Cb. *ta* Ca. *yāt** K. P. は、°*bhuṃjīt** A. °*bhuṃjīta* Ca. °*bhuñjīyāt** Cb. K. P. °*bhuñjīta* : B. °*bhuñjeta* : O. となる。

Kn 119

(1) fn. 1) *bodhī ca* Cb. *bodhāya* A. B. Ca. *bodhiya* K. P. は、*bodhāya* A. B. O. *bodhiya* Ca. P. *bodhīca* Cb. *bodhiya* K. となる。

(2) fn. 11) *śayyā* O. *śayā* P. は、*sayanā* A. B. Ca. *śayanā* Cb. K. P. *śayyā* O. となる。

次に、(B)の問題点に関連して、グループ分けのキーワードに着目してみたい。

Kn (29.12-30.2)

śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ | alaṃ śāriputra etāvad eva bhāṣitaṃ bhavatu paramāścaryaprāptāḥ śāriputra tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhāḥ | tathāgata eva

写本A (=R)には、この箇所が欠落し、他の写本でこの箇所を補充しているが、その旨が記されていない。Aを底本とした以上、その旨を脚注に記すべきであっ

ただろう。この欠落箇所を補充するなら、「R系」写本を参照して、T9をここに充当すべきである。「R系」写本群の中でもT9とRはもっとも類似しているからである。その場合、下線部分は *bhāṣitaṃ* と記さねばならない¹⁸⁾。T9の他にT4, T5, A2, A3がこのように読んでいる。A2とA3は、たがいに類似し、テキストの多くの箇所でR系写本と一致する。なお、Kn 29 fn. 11) は不要と思われる。

Kn 48.11 (68-ab)

evaṃ ca bhāṣāmy ahu nityanirvṛtā ādi praśāntā imi sarvadharmāḥ |

校訂本の本文はこのように読み、下線部分についての脚注はない。しかし、このような箇所にこそ、脚注は次のように付けられるべきであった。

ādiprasāntā A. *ādiprasāntā* Ca. Cb. *ādiprasāntā* K. O. *ādipravṛttā* B. なぜなら、校訂本の発刊以後に公表された写本で、下線部分がBと同じ読みの写本は、K, C6, T2, T3, T6, T7, N2, N3のように、多く存在するからである¹⁹⁾。これらの中で、C6, T6, T7, N2は、B, A1と共に「B系(戸田宏文の命名)」と称される写本群として分類される。これら以外の写本の読みは、*ādiprasāntā* C3, T9 *ādi[h]praśāntā* C1 °*sāntā* C2, *ādiprasāntā* T4, T5, *ādiprasāntā* A1, A2, A3, P3 °*pra[r]śāntā* N1となる。なお、Aの *adi*° は、*ādi*° の誤写である。ここは、「R系」の強固な結束が乱れている、比較的稀な一例である。

注

- 1) *Saddharmapuṇḍarīka*, Bibliotheca Buddhica, 10, St. Petersburg 1908–1912. 本書での略号はKn
- 2) *Saddharmapuṇḍarīka*. Preface. p. 1 ff.
- 3) これが、英国・アイルランド王立アジア協会に所蔵される梵文法華經写本(略号R校訂本での略号はA)である。なお、梵文法華經写本の略号については、梵文法華經写本略号一覧を参照。
- 4) 現在は大英図書館に所蔵されている。
- 5) 湯山(1970, pp. 4, 16)校訂本での略号はP。このテキストの読みは、ビュルヌフの仏訳の底本となったパリのアジア協会の写本P3の読みとよく一致する。
- 6) マックス・ミュラー(Max Müller)は、この書物のコピーをワイリーから入手したと

思われる。それが南條によって校訂本の第24章の校合に使用されたと考えられる。
脚注にCh.の略号で記されている。湯山(1970, p. 20, 45)

- 7) 「15種類」というのは、現時点で確認されている紙写本のおおざっぱな数で、未発表、未発見のものを勘案すると、正確な本数は不明である。
- 8) 筆者は現在、Rのローマ字本発刊の準備を進めている。
- 9) 戸田宏文が開拓した、「ネパール系写本のグループ分け」の研究は、この経典のネパール系写本の数が、他の経典と比較して、類例を見ないほど多数存在するという特別な条件によって成立している。従って、この研究の推進が、梵文法華経の原典研究に不可欠な条件の一つである。筆者は、この「ネパール系写本のグループ分け」を研究課題としている。
- 10) 第24章「普門品」のワイリーのテキストは、その系統を見極めることが困難なので除外する。
- 11) 戸田(1997, p. 16)
- 12) RとT9が最もよく一致するが、稀にRとT9、T5、T4がバラつく箇所がある。たとえば、Kn 48.11や第18章「法師功德品」のKn 370辺り。
- 13) 戸田(2000a, p. 63)
- 14) 小槻(2003, p. 3)
- 15) 戸田(1998, p. [2])
- 16) 南條文雄・泉芳環(1913, 緒論二) Kern(1884, xxxviii)
- 17) 戸田(1981, p. 5)
- 18) 戸田(1998, p. [32][34])
- 19) 戸田(1996, p. 22)
- 20) 小槻(2003, p. 247 ff.)

梵文法華経写本 略号一覧

(校訂本の校合に使用された写本はブロック体で記した)

A1: No. 4079, The Asiatic Society, Calcutta.

A2: No. 4199, The Asiatic Society, Calcutta.

A3: No. B7, The Asiatic Society, Calcutta.

B (B in Kn): Or. 2204, British Library, London.

C1: Add. 1032, Cambridge University Library, Cambridge.

C2: Add. 1324, Cambridge University Library, Cambridge.

C3: Add. 1682, Cambridge University Library, Cambridge.

C4 (Ca in Kn): Add. 1683, Cambridge University Library, Cambridge.

C5 (Cb in Kn): Add. 1684, Cambridge University Library, Cambridge.

C6: Add. 2197, Cambridge University Library, Cambridge.

K: Kawaguchi's ms., The Toyo Bunko (Oriental Library), Tokyo.

N1: No. 4-21, National Archives of Nepal, Kathmandu.

N2: No. 3-678, National Archives of Nepal, Kathmandu.

N3: No. 5-144, National Archives of Nepal, Kathmandu.

P1: Nos. 138-139, Bibliothèque Nationale, Paris.

P2: Nos. 140-141, Bibliothèque Nationale, Paris.

P3: No. 2, Société Asiatique, Paris.

Pe: No. 0004, Library of the Cultural Palace of the Nationalities, Beijing.

R (A in Kn): No. 6, The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London.

T2: No. 408, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T3: No. 409, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T4: No. 410, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T5: No. 411, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T6: No. 412, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T7: No. 413, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T8 (K in Kn): No. 414, University of Tokyo General Library, Tokyo.

T9: No. 415, University of Tokyo General Library, Tokyo.

W: Ms. formerly in the possession of the late Mr Watters, ex-British Consul in Taiwan.

O: Kashgar Manuscript

参考文献

Kern, Hendrik

1884 *The Saddharma-puṇḍarīka or The Lotus of the True Law*, Oxford

小槻晴明

2003 『東京大学総合図書館所蔵梵文法華経写本(No. 414)ローマ字版』東京(*Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from University of Tokyo General Library (No. 414), Romanized Text*, Tokyo)

戸田宏文

1981 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Central Asian Manuscripts: Romanized Text*, 徳島

1996 『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』徳島

1997 「法華経原典研究の現況と課題」『佛教大学総合研究所報』京都

1998 徳島大学総合科学部『研究報告書』V

2000a 「梵文法華経『安樂行品』の偈頌について (Kn 283.6-285.4)」『戸崎宏正博士古稀記念論文集——インドの文化と論理』福岡